

「産業革命」の成立

—— その語源的解釈 ——

神 武 庸 四 郎

I はじめに —— 対象限定 ——

いわゆる「産業革命 (the Industrial Revolution, die industrielle Revolution, la révolution industrielle)」という言葉が表す諸史実の集合の解釈についてはおびただしい量の研究蓄積が存在している。これは周知の事実であり、あらためて指摘するまでもないことである。ところが、この言葉の由来ということになると研究らしい研究はほとんど見出されない。それはある意味では当然であろう。というのは、その種の研究に対してなにかの科学的な意味を与えようとする試みは、そのこと自体が研究に対して有意義な作業となりうるかどうか疑わしいばかりでなく、同時にかなりめんどろな方法論上の問題をも当事者に突きつける可能性があるからである。実はそうした問題に対する答えを模索しようとする姿勢こそが歴史研究にとって少なからぬ「発見的価値」をもたらさうという点を明らかにすること、これが本稿のおもな課題である。なぜそうした課題の設定が必要なのかという問いもまた、合わせて答えられるべき事柄ではあるが、その解答は行論のうちに見出されるであろう。そこで最初に当面の課題を検討するうえで方法についてあらかじめ理論的な見通しを立てておくことにしよう。

II 方法 —— 「言語的解釈学」から「語源的解釈学」へ ——

まず、一般に言語を対象としてそれに解釈を施すことの意義を説明しなくてはならない。そのために、いわゆる解釈学 (hermeneutics, Hermeneutik, herméneutique) の一般的規定を与えることから始める¹⁾。解釈学とはギリシャ

語の *ἐρμηνευτικός* (外国語の通訳) に由来するものであり、端的に「理解」の方法を意味する。このばあい「理解」とは「外部」の記号・表現から「内部」の意味を把握することである。とくに、「外部」の記号・表現としての言語(古典籍)を通じた解釈学をひとまず「言語的解釈学」とよんでおこう。それがいち早く登場したのは、もちろん、ヨーロッパにおいてであった。「言語的解釈学」は、まず神学の領域で発展をとげた。とりわけギリシャの古典学と聖書との「調和的」結合をいかに実現していくか、また両者の「思想」の整合性あるいは「無矛盾性」をどのような形で思弁的に根拠づけられるか、といった問題の解決が決定的な動機となって、スコラ哲学以降の神学の展開のなかで「言語的解釈学」は成立してきたのである。その典型的な形態は、ギリシャ古典(主にアリストテレス)〔「外部」〕の内容を解釈し、その意味づけを聖書のなか〔「内部」〕に求める、というものである。名実ともにこの種の解釈学を完成させたのはシュライエルマッヘル(F. E. D. Schreiermacher)であった。彼は自己の神学的方法を文字通り聖書解釈学として体系化したのである。その後、聖書解釈学はベック(August Böckh)によって文献解釈学にまで拡大され、ついにはディルタイ(Wilhelm Dilthey)によって「現実的存在の解釈」の学として普遍化されるにいたった²⁾。

日本においても荻生徂徠や本居宣長が文献解釈学としての「言語的解釈学」を事実上構築している。それは言語(とくに語源)〔「外部」〕の意味や成立時期の検討を通じて言語の歴史的な〔「内部」の〕意味を確定し、或る種の時論的・政策的・思想的な「内部」構造を組み立てるための根拠を析出しようとするものであった。荻生徂徠の古文辞学においては『六経』(易・書・詩・礼・楽・春秋)〔「外部」〕に記された「ことば」(辞)に表現されている「こと」(制度文物)〔「内部」〕が『四書』(「外部」)によって意味づけられ、そうした方法を通じて人間の規範としての「道」が探究されている³⁾。また、本居宣長の国学を貫く方法は、「言」(言語)と「意」(思想)および「事」(事実)とを相互に引き比べつつ、「外部」と「内部」との対応を叙述によって導き出そうとするものである⁴⁾。このばあいの宣長の研究態度は、小説家石川淳の示唆しているように、現象学的で

さえあった⁵⁾。

ところで、ヨーロッパの神学と江戸時代の古文辞学や国学との方法的類似性は注目に値するが、同時にそれらは共通の欠陥をもっていた。一言でいうと、それらはいわゆる歴史主義(Historismus)の特徴をあまりに色濃く具えていた。周知のように、歴史主義は合理主義と同じく啓蒙主義的な諸思潮の集合体のなかから発生してきたものであり、抽象的世界像の内部で展開される合理化の空虚性に対する批判的見地を提示しうる立場として積極的な意味をもってきた⁶⁾。しかし、過度の歴史主義は往々にして無節操で没理論的な相対主義に陥りやすく場当たりの屁理屈や浅薄な「解釈」に満足する思想態度ばかりを横行させるのが常であって、そこからは現実と理念との、あるいは経験と理論との対質をはかる方法的立場や経験的世界を基盤とする抽象化あるいは理論化への志向はなかなか出てこないのである。この点は歴史研究一般に含まれる欠陥であり、丸山眞男のいう「実感信仰⁷⁾」と歴史「研究」との折り重なる部分でもある。とはいえ、「言語的解釈学」が多様な「発見的価値」を産出しうることも確かであり、言語としての「産業革命」を考える上でも——限定的ではあるが——少なからぬ意味をもっているといえよう。

他方、周知のように、解釈学を普遍化してこの限界を「克服」していこうとする傾向も20世紀のヨーロッパにおいては顕著になった。それはデルタイからハイデッガーにいたるヨーロッパ哲学の系統である⁸⁾。しかし、その方面の検討は哲学固有の領域に委ねられるべきであろう。むしろ、「言語的解釈学」の実例を「産業革命」にかんして実演するほうが「生産的」である。とはいえ「言語的解釈学」をそのままの形で受容するわけにはいかない。というのは、歴史の対象一般の「内部」に入り込んでいくための「外部」は古典籍のような所与の「価値基準」ではありえないからである。それは歴史の対象が対象化され収斂していくような、時空上の「点」と「線」——観察者の側からいえば、「視点」と「視線」——でなければならない。私は広い意味での語源に言語解釈の「視点」と「視線」を求めようと思う。宣長や徂徠は「外部」としての語源の意義に気づいてはいたが、その事実を方法化し普遍化するにはいたらなかった。そこであらためて、

語源の探究と解釈を通じて歴史の「内部」を究める方法が必要になるのである。そのばあい、語源とは或る言語の発生とともに意味変化のプロセスを含むものでなくてはならない。そうした語源に焦点を合わせて歴史の「内部」を省察する「言語的解釈学」を「語源的解釈学」と名づけよう。次項以下の考察は「産業革命」にかんする「語源的解釈学」の事例研究にほかならない。

III 「産業革命」という言葉の生成

ヨーロッパ語（英語、ドイツ語およびフランス語）としての「産業革命」の由来を検討することからはじめよう。

まず、「革命」の語源を簡単に検討しておく。ロベールの『フランス語辞典⁹⁾』によると、révolution という語が「社会的・道徳的秩序の突然の重大な変化」というほど意味で最初に用いられたのは1559年のことであり、とくに「国家の革命 (Révolution d'Etat)」という用例は1636年に登場している。また、パウル (Hermann Paul) の『ドイツ語辞典¹⁰⁾』によると、「変革 (Umwälzung)」という意味で Revolution が用いられたのは16世紀末であつたらしい。ちなみにパウルの辞典は、「革命」については英語の用例がまず現れ、つづいてフランス語の用例が登場し、最後にドイツ語の用例が現れたように記しているが、必ずしも信憑性のある記述とはいえない。Oxford English Dictionary (以下では、OED と略記) の記載にしたがえば、「統治者ないし統治形態の強制的な交替」という意味で revolution の使われた用例は1600年が最初のものである。その後、1660年や1688年の歴史的事件に関連して revolution が用いられている。フランス語と英語の「革命」はほとんど同じ時期に現れたと見るのが妥当であろう。いずれにせよ、「革命」は「産業」にくらべて一世紀ほど早く出現した言語であるといえそうである。

そこでつぎに、「産業」の語源を考えよう。OEDによれば、industry という英語の語源は、すでに14世紀に用例の見出されるフランス語の l'industrie (女性名詞) およびラテン語の industria に求められる。しかし、これらの言葉の意味は「勤勉」や「活動」や「技能」である。ドイツ語の Industrie はこれらに比して

ごく新しい言葉であることがわかっている。問題は、l'industrieあるいはindustryの意味転換がいつごろ生じたかという点である。ロベールの辞典の記載にしたがえば、l'industrieが「営利をめざした生産活動」とか「工業」といった意味をもってくるのは18世紀前半のことであるらしい。また、これの類義語であるl'industrialisme(男性名詞)という表現(工業体制ないし産業制度の意)が現れるのは19世紀の30年代になってからである。他方、OEDによると、industryが同様の意味転換をとげるのは18世紀後半であった。同様に、フランス語のl'industrialismeに対応するindustrialismという用例は19世紀の30年代頃に現れたが、どちらのほうが先につかわれたかは不明である。つぎに、パウルの『ドイツ語辞典』によれば、ドイツ語のdie Industrieは1750年頃、フランス語から借用された言葉、つまり、翻訳語であった。類似の意味をもつ(しかし、もっと広義の)ドイツ語にdas Gewerbeがある。それは営業という広い意味をもち、とりわけ鉱山業を指すのに使われている。この語源は相当古く、たとえば、15世紀にはGewerbsmannという単語が現れている。また、Gewerbeという言葉はwerben(英語のrecruit)に由来するが、後者は11~13世紀の中高ドイツ語に見られる。いずれにしても、工業という意味でindustry, l'industrie,あるいはIndustrieという語が用いられるようになったのは18世紀になってからのことであったといえよう。当然ながら、「産業革命」の用例もそれ以降に——実際には19世紀になってから——出現することになる。

それでは「産業」と「革命」とはいつごろどこで結びついたのであろうか。それがフランスであつたらしいことは、すでに80年ほど前に書かれアメリカ合衆国の経済学会の雑誌に掲載された「研究ノート」が部分的に明らかにしている¹¹⁾。「産業革命」の初期の用例を年次を追って挙げれば、まず最初のものは1827年にフランスの雑誌に載ったGrande Révolution Industrielleという表現である。それは「芸術、工業および社会制度の変化」を意味していたようである。つぎに、1829年には特定の地方——フランス北部——における産業活動の盛衰ないし交替を意味する言葉としてrévolution industrielleが使われている¹²⁾。しかし、ワットやアークライトの発明に起因するイングランドの急激な工業化を意味するフラ

ンス語として *la révolution industrielle* がはじめて用いられたのはもっとのちのことである。フランスの自由貿易主義者ブランキ (Adolphe Jérôme Blanqui) は1837年に出版されたヨーロッパの経済学説史にかんする著作のなかでこの言葉をそうした意味で使っている¹³⁾。それから8年後の1845年には——おそらく最初のドイツ語の用例と思われるが——フリードリヒ・エンゲルスが彼の有名な著作 *Die Lage der arbeitenden Klasse in England* のなかで *die industrielle Revolution* という表現を用いている。OEDによると、「産業革命」の最も古い英語の用例は1848年に現れている。それは経済学者ミル (John Stuart Mill) の著作『経済学原理 (*Principles of political economy, with some applications to social philosophy*)』に見い出される。本書の Book III, Chapter 17においてミルは *a complete industrial revolution* という表現を使っているが、その意味するところは潜在的な資源があっても活用される状態にない未開発国の急激な総体的工業化であり、特別の歴史的対象を指定して用いられたものではなかった。18世紀後半におけるイングランドの経済的・社会的転換過程を特定化してこの言葉を用いたのはトインビーが最初であろう。1881年から翌年にかけてオックスフォード大学においておこなわれた講義の内容に基づいて1884年に公刊された彼の著作 *Lectures on the Industrial Revolution of the eighteenth century in England* がそのことを証明している。

さて、以上の諸事実を一応まとめておくと、最も初期のフランス語の二つの事例とミルの用例を除いて、「産業革命」という言葉が18世紀後半から始まるイギリスの急激な工業化ならびにそれによって生じた未曾有の社会変動の過程を意味するものとして1830年代以降使用されるようになったことは明らかのように思われる。

IV 日本語としての「産業革命」

つぎに、日本語(翻訳語)としての「産業革命」がいつごろ誰によって用いられることになったかを、推定を交えて考察してみよう。

いうまでもなく「産業革命」とは「産業」と「革命」とを結合した合成語であ

る。生業(ナリワイ)や生産活動一般をさす「産業」という漢語は8世紀末に『日本霊異記』(787年成立か?)や『続日本紀』(797年成立)にはじめて登場する。前者においては「農作業」の意味で、後者においてはそれより広く「生産活動全般」の意味で「産業」という言葉が用いられている¹⁴⁾。また、「革命」というのは、周知の通り、「易姓革命」に由来する漢語であるといわれている¹⁵⁾。これらの漢語はヨーロッパにおいて「産業」や「革命」の出現した時期よりもはるかに古くから使われており、中国においてはいずれの語源も紀元前にまで遡ることができる。それらの古い漢語はいつどのような形で結びつけられたのであろうか。ひとつの推測を試みるならば、両者は明治維新以降翻訳語という形ではじめて結合したのであろう。日本において the Industrial Revolution という英語を日本語に置き換えようとした(おそらく)最初の事例については、これを明治29年(1896年)にまで遡ることができるように思われる。同年、織田寛なる人物によって H. de B. Gibbins の著書 *The Industrial History of England* の第4版(1895年)が訳されているが、そのなかで the Industrial Revolution という表現に対して「工業的革命」なる訳語が充てられている。この当時一般的に「工業」という言葉がいかなる意味で用いられていたかは定かでないが、古くからの用例として『日葡辞書』(1603年)にしたがえば、「工業」とは手工業者(職人・大工など)の営みを意味する言葉であった。しかし、ギビンズの本に出てくる「工業」は木綿工業や機械工業という意味での工業、すなわち農業あるいはもっと一般的に一次産品生産とは区別される機械生産の新しい形態を指しているから、訳者のほうもその事実に対応させてこの言葉を用いたにちがいない。それでは「工業」の意味転換はいつごろ生じたのであろうか。江戸時代にこうした用例が存在していたかどうかは定かでないが、明治8年(1875年)にはすでに福沢諭吉が新しい意味での「工業」という表現を用いている¹⁶⁾。したがって、ギビンズの著書の訳者が industry を「工業」と訳したとしても、当時としてはそれほど奇異の感を与える表現ではなかっただろう。

つぎの事例は幸徳秋水によるものである。彼は1903年(明治36年)に刊行された著書『社会主義神髓』のなかでマルクスの『資本(Das Kapital)¹⁷⁾』に依拠し

た（と思われる）議論を展開している。そのばあい、彼は2箇所（岩波文庫版、22, 23頁）で「産業的革命」という訳語を用いている。マルクスが『資本』のなかで用いた表現はdie industrielle Revolutionであった。この表現は『資本』の第1版（1867年・慶応3年刊行）においてすでに使用されている。幸徳秋水はなぜ「工業」ではなく「産業」という言葉を充てたのであろうか。おそらく、彼がマルクスの議論を解釈するばあいに工業のみならず農業や鉱業をも含む広い意味でIndustrieというドイツ語が使われていると考えて、そのような訳語を思いついたのであろう。実際に彼にとって「産業制度」は「奴隷の制度」も「封建の制度」も「資本家制度」もすべてを含んだ一般的概念であって、たとえば「中世紀」においては「独立工人の手工」も「自由民若くば農奴の耕作」も「産業」に包含されているのである¹⁸⁾。とはいえ、幸徳の用いた翻訳語は「産業的革命」であって「産業革命」ではないことも事実である。それでは、die industrielle Revolutionあるいはthe Industrial Revolutionという表現をはじめて「産業革命」と訳したのはいったいだれであろうか。

未調査の資料が残されているので確信をもって断言できるわけではないが、「産業革命」という訳語を最初に用いたのは大原祥一なる人物ではないかと思われる。彼は1901年（明治34年）の『東京経済雑誌』の「寄書」欄に「国家と労働問題」と題する小文を投稿し、そのなかでつぎのように書いている。すなわち、「産業革命以来機械の使用大に増し、殊に電気蒸汽の応利益々盛になりたると共に、危険なる機械を發明され、注意保護到らざれば災禍其数を増すが如き、……¹⁹⁾」と。

全体の論旨から推して、ここに使われている「産業革命」が「イギリス産業革命」を指していることは明らかである。もっとも、大原論文は直接に「イギリス産業革命」を論じたものではないのだが、この用例が現れてのち3年後の1904年（明治37年）にはイギリス経済史にかんする翻訳書のなかで「産業革命」が用いられている。その原典はプライス（L.L. Price）の著書 *A short history of Eng-*

lish commerce and industry (London, 1900) であるが、それが『英国商業史』という表題で早稲田大学出版部から公刊された。訳者は和田垣謙三と津田欽一郎である。ブライスは the Industrial Revolution ——それは「イギリス産業革命」を指している——と表現している箇所はすべて「産業革命」と訳されている。

ところで、著名な経済学者が「産業革命」を用いた比較的古い事例は1906年(明治39年)に相次いで見出される。ひとりには福田徳三であり、彼は同年1月に書いた論文(『慶応義塾学報』掲載)と2月に『中央公論』に掲載した論文のなかで「価値革命」としての「産業革命」という、いくぶん理論的な議論を展開している²⁰⁾。いまひとは河上肇である。彼は保護貿易主義者あるいは経済的ナショナリストとして論陣を張っていたが、同年10月17日の『読売新聞』紙上に寄稿したエッセイ「自由貿易の愚論(六)」のなかで「産業革命」という表現を二度にわたって用いている²¹⁾。なお、同じ年の1月に書かれたエッセイ「無題録」において彼はいまだ「産業革命」という言葉を使わずに「産業上の革命」という表現を用いていた²²⁾。いかなる心境の変化があったのかは定かでないが、とにかくこの9カ月間のうちに彼が訳語を大きく変更したことは事実である。さらに注目に値するのは、訳語の変更とともに「産業革命」についての河上の理解が相当に深められたことである。このことはつぎの引用文から了解されるであろう。

「英国産業の歴史を繙くに、千七百七十年にはハーグリブスの発明あり、翌千七百七十一年にはアークライトの発明あり、千七百七十九年にはクロプトンの発明あり、紡績織物の諸業茲に面目を一新するの端を開きしと同時に、有名なるワットの蒸気機関は正に此間に於て発明せられ、而して鉱山採掘の業はブルトンにより、交通運搬の業はプリントレイにより、各々一大進歩を為し、英国の産業は頓に面目を革新して所謂産業革命の大業を成就せしに当り、顧みて千七百六十二年巴里条約締結後に於ける歐洲列邦の状態を一瞥するに、仏蘭西振はず、西班牙振はず、和蘭瑞典那威伊太利又皆振はずして、独逸露西亞の如きは未だ興に至らず、畢竟するに当時の英国は世界の産業界に於ける唯一の独占主たりしなり、…… (以下略) ……²³⁾」

ところで、この事実に関連して「産業革命」と題する本をはじめて書いた日本人はだれであろうか。おそらく、上田貞次郎のものが最初であろう。彼が大正12年(1923年)に公開した著書の題名は「英国産業革命史論」であった。また翌年、彼は「産業革命史研究」と題する論文集を出している。これら二冊の本は改訂のういで一冊にまとめられ、昭和5年(1930年)に『経済学全集』の第39巻として改造社から出版された。ちなみに、英語文献としてはじめて「産業革命」を本格的に論じた作品として知られる Arnold Toynbee の前述の著書の翻訳は、1908年(明治41年)に吉田巳之助により、さらにその後1925年(大正14年)には芝野十郎によって試みられた。芝野訳の表題は『十八世紀英国産業革命史論』となっている²⁴⁾。この表題に正しく訳されているように、このばあいの the Industrial Revolution はミルの用語法に見られた類型的な産業革命を指しているのではなく、イングランドで最初に起こった産業革命を意味していた。

さて、これまでの語源ならびに用例の検討によって「産業革命」が時期と場所の限定された歴史的事象を指していることが判明した。それは18世紀後半のイングランドに発生した産業革命にほかならない。通常の議論の立て方からすれば、こうした用語法の限定に続いて「産業革命」の歴史的内容が叙述されるという具合に展開されるのであろうが、本稿の課題はまったく別の形でしめくられなくてはならない。それは「語源的解釈学」と歴史研究との関連の評価という形をとる。

V 語源的解釈の「解釈」—— 結語に代えて ——

さて、言語としての「産業革命」(IRと略記)の語源にかんする以上のような詮索を踏まえて、代表的事例を時間的順序に並べると

$$f \text{ I R}_{1837} < g \text{ I R}_{1845} < e \text{ I R}_{1884} < j \text{ I R}_{1901}$$

という具合になるだろう。ここに、前方の添字は順にフランス語、ドイツ語、英語、日本語を表し、後方の添字(数字)は、18世紀後半のイングランドにおける産業革命を意味する用例がはじめて出現した年を示している。したがって、英語の「産業革命」はミルの用例の現れた年ではなくトインビーの用例が出現した年

を示している。この順序関係は語源という「視線」から導かれた「解釈 (interpretation)」の時間的順序を表しているが、この「解釈」という表現は、数学基礎論——とくにその一部門としてのモデル理論——の用語法と同様に、「モデル」と同一視することができる²⁵⁾。そして「モデル」は「特定化された」構造にほかならない²⁶⁾。すなわち、上の「式」は時空の指定された四つの構造を時間的順序に配列したものである。この順序における最初の要素 ($I R_{1837}$) ——「特定化された」構造——が時間的に先行する史実を指定する。その史実は往々にして最初の言語的用例によって「共時化」された構造としての意味を与えられる。たとえば、1830年代を「いま」(歴史的現在)として生きていたブランキという人物の思念する意味ないし意味連関(「内部」)に既存の言語あるいは新しい記号列としての言語(造語)——「外部」——が当該人物の思惟過程にそくして対応させられるわけである。ここには「外部」から「内部」への、解釈に照応する関係が逆転されて「内部」から「外部」に向かう「逆関係」が現れる。もっと正確に言えば、この「逆関係」が後の「現在」から投射された「視線」を通して追跡可能であるからこそ、解釈という関係が生成してくるのである。語源的解釈の歴史研究における意義はまさしくこの点に求められる。史料批判による史実——したがって構造——の確定に際して、史実にいわば特定の「時空座標」を与えてそれを具体的に制限し史実が存在するにいたった場所の輪郭を明瞭にする「モデル」を提示することが「語源的解釈学」の果たすべき役割であろう。そこには「内部」から「外部」への「逆関係」——「逆写像」!——の挿入された広義の「語源」という構造=史実が浮上してくるのである。こうした意味において史料批判学と「語源的解釈学」とはともに「歴史学」の主内容を構成することになる²⁷⁾。

ひとたびこのような方法的視座を確立しておくならば、「産業革命」のばあいと同様の語源的解釈は他の用語にも一般的に準用されうるだろう。とりわけ経済史学において必須の用語としてここでは「資本主義 (capitalism, Kapitalismus, capitalisme)」を取り上げてみよう。英語としての「資本主義」の最初の用例は、1853年から1855年にかけて発表されたサッカリ (William M. Thackeray) の小説『ニューカム家 (The Newcomes)』に見出される²⁸⁾。そこでは capitaliza-

tion ないし profitability というほどの意味で capitalism という表現が用いられている。また、ヘルマン・パウルの辞典によれば、ドイツ語で「資本主義」という言葉を最初に用いたのはロートベルトゥス (Johann Carl Rodbertus) であつたらしい。1868年のことである。さらに、フランス語の「資本主義」はルイ・ブラン (Louis Blanc) が1850年にはじめて用いたとされている²⁹⁾。これらの事実が正しいと仮定すれば、「資本主義」という言葉が流布しはじめたのは1850年代から60年代にかけての西ヨーロッパにおいてであるといえるだろう。それはちょうど、名実ともにイギリスが「世界の工場」として資本主義の世界体制 (パックス・ブリタニカ) をリードし、コブデン・シュヴァリエ条約に象徴される「自由貿易」体制が国際的経済関係の基調として展開しはじめる時期に対応している。上述の表記法を用いれば、「資本主義」を CA と置き換えて、

$${}_rCA_{1850} < {}_eCA_{1853-55} < {}_gCA_{1868}$$

という具合になるであろう。かくして CA は IR の語源構造の成立する時空圏に組み込まれることになる。この事実をどのように評価して普遍的な意味づけをおこなうべきであろうか。その問いについて答えを導き出す試みは、少なくとも歴史学の領域を超えたところに委ねられなくてはならない。

- 1) たとえば、三木清の解說的論考が参考になる。『三木清全集』第12巻 (岩波書店, 1967年), 302-303頁, 参照。
- 2) デイルタイにとって「解釈 (Auslegung)」とは「文字によって固定された生の表示の、技芸的な (kunstmäßig) 理解」を意味し、「文字によって固定された生の表示の理解の技芸論 (Kunstlehre)」が「解釈学」であった (*Diltheys Gesammelte Schriften*, Band 5, 1924, SS.332-333.)。
- 3) 彼の『学則』には「世は言を載せて以て遷り、言は道を載せて以て遷る。道の明かならざる、職として是、之に由る。」とあり、また『弁名』には「今文を以て古文を視、今言を以て古言を視る。故に其の心を用ふること勤むと雖も、卒に未だ古の道を得ざる」云々とある。引用文の出所は、金谷治編『荻生徂徠集 (日本の思想第12巻)』(筑摩書房, 1970年) である。
- 4) 本居宣長は『古事記伝』のなかでこういつている。「抑意と事と言とは、みな相稱へる物にして、上ツ代は、意も事も言も上ツ代、後ノ代は、意も事も言も

後ノ代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後ノ代の意をもて、上ツ代の事を記し、漢国の言を以テ、皇国の意を記されたる故に、あひかなはざる事多かるを、此記は、いさゝかもさかしらを加へずて、古へより云ヒ傳へたるまゝに記されれば、その意も事も言も相稱て皆上ツ代の實なり。是レもはら古への語言を主としたるが故ぞかし。すべて意も事も、言を以て傳ふるものなれば、書はその記せる言辭ぞ主には有ける。」(『古事記傳』一之巻「古記典等總論 [イニシヘブミドモノスベテノサダ]」) 引用文の出所は『本居宣長全集』第九巻(筑摩書房、1968年)、6頁。

- 5) もちろん、この表現は石川淳の議論についての私の解釈である。彼の議論はもっと込み入っている(詳しくは彼の論稿「本居宣長」(『夷斎小識』(中央公論社、1971年)所収)、参照)。石川によれば「半神半俗」の「魔」的存在が本居宣長そのひとであった。宣長にとって「道」とは具体的な自然であり、とくに自然法であった。神もまた「具体的」な存在であり、正邪両方の「こころ」をもった実在であった。宣長の想定する「神」はレヴィ・ブリュルのいうクラ(kra)に近いものであり、その意味で「自然神」である(拙著『パリアの楔』[有斐閣、1994年]第5章参照)。ところで、「自然神」を内在させている宣長という人格は「融即律(la loi de participation)」を成立させる恰好の場所となる。本居宣長=人格にとって「aである」ことと彼に内在する神格にとって「aでない」こととは両立する。すなわち、矛盾が「内在」していて、しかも矛盾であることは意識される必要はない。丸山眞男流に言えば、仏もキリストも宣長の内部に「雑居」することが可能になる(「雑居性」と「雑種性」の区別については、丸山眞男『日本の思想』[岩波新書、1961年]、63頁以下参照)。そこからは矛盾にメクジラを立てる「理」は排除され「融即律」の成り立つ世界像が産出されるわけである。他方、本居宣長の「もののあはれ」論は抽象化の作用に重きを置いた合理的な見方を示唆している。「もののあはれ」なるものは抽象化されたパトスそのものにほかならないので、それはまさしく現象学的観点——「形相直観」——としての普遍性をもっているように私には思われる。
- 6) こうした思想史的経緯については、Hugo Preller, 'Rationalismus und Historismus: Ein Beitrag zur Geschichte der Aufklärung und der Gegenwart', in *Historische Zeitschrift* (Bd.126, 1922.), 参照。
- 7) 丸山眞男, 前掲書, 53頁以下, 参照。なお、丸山は「ヨーロッパで、歴史主義といわれる思想は、やはり直接には絶対精神の自己実現(発展)として歴史をとらえる汎合理主義に対する反動として生まれ、あらゆる時代はそれぞれ神

につながる(ランケ)という主張で、逆に歴史的個性を絶対化したところに特徴づけられる」(同、118-119頁、下線は原文傍点)といっている。歴史主義についてのこの規定自体は正しいのであるが、その影響力や機能を一般的に評価するためには、さらに普遍的かつ原理的な意味づけを必要とするであろう。さもなければ「実感信仰」と歴史主義との密接な概念的つながりも理論的に評価されえない。

- 8) ところが、この系統は哲学における歴史主義の「深化」を方向づける思想潮流をも産み出す結果を招いた。
- 9) ここで参照したのはつぎのものである。P. Robert, *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, 6vol. et 1 supplement, Le Robert, 1966. 今後、フランス語の語源についてはこの辞典の記載に依拠することにした。そのほかの辞典との比較・対照は別の機会に委ねられる。
- 10) 詳しい書名を記せば、つぎの通りである。Hermann Paul, *Deutsches Wörterbuch*, 5., völlig neubearbeitete und erweiterte Ausgabe von Werner Betz, Max Niemeyer, Tübingen, 1966. これから登場するドイツ語の語源にかんする詮索はこの辞書によるものである。ほかの辞書の記載事項との比較・対照は他日を期したい。
- 11) もっとも初期の用例のいくつかがフランス語文獻に見られることを指摘している論稿として、Anna Bezanson, 'The Early Use of the Term Industrial Revolution', in *Quarterly Journal of Economics*, Vol.36 (1922), 参照。
- 12) 1829年にドゥ・ロネ(Prosper de Launay)なる人物がこの言葉を用いている。*Ibid.*, p.344, 参照。
- 13) 関係箇所を引用すると、つぎの通りである。'Cependant, à peine éclos du cerveau de ces deux hommes de génie, Watt et Arkwright, la révolution industrielle se mit en possession de l'Angleterre.' (Adolphe Blanqui, *Histoire de l'Economie Politique en Europe*, tome deuxième, Paris, 1837, p.209)
- 14) これらの用例は、『日本靈異記』のばあいには中巻の第16番目の説話のなかにあり、また『統日本紀』においては大宝元年(701年)9月9日の記事のなかに見出される。なお、古代中国における最も古い用例としては、『韓非子』(紀元前3世紀)の「解老」篇にある「而外不事利其産業」という部分が挙げられよう。それは「生業」というほどの意味である。類似の用例は『史記』(紀元前1世紀)にも見られる。
- 15) いうまでもなく、「易姓革命」とは、統治者の「姓(かばね)」を「易(か)」

- えて天「命」を「革(あらた)」めることである。しかし「革命」は辛酉(カノトノトリ)の年をさすばあいもある。それは「変革」を促す凶運の年である。
- 16) 福沢諭吉は「『ゼイムス・ワット』蒸気機関を工夫して世界中の工業これがために其趣を一変し」云々と書いている。『文明論之概略』(岩波文庫版, 1962年), 133頁, 参照。
 - 17) 念のために補足しておく, 『資本』第1巻の出版は1867年(慶応3年)である。その後, フランス語版とロシア語版が1872年(明治5年)に出ており, 英語版はずっと遅れて1887年(明治20年)に出た。
 - 18) 幸徳秋水著『社会主義神髓』(岩波文庫, 1953年), 20-22頁, 参照。
 - 19) 『東京経済雑誌』第43巻(明治34年), 418頁。もとより, この論文の主題は「産業革命」ではなく, 「資本」と「労働」との敵対関係を調整する国家機関の設置を提言することにあった。大原は, アメリカ合衆国の「労働局」に対応する行政的機関を設置するよう求めているのである。この寄稿文よりも3年ほど前に書かれた小文のなかで大原は「富之不平均」の是正を訴えている。彼自身の言葉によれば「苟も一國を平和に富強に維持せしめんと欲せば, 先づ富の配分に注意し, 又貧富の間をして円滑ならしむべき方法を講ぜざる可らず, 是れ余の愛國者に敢て望む所なり」ということである(『東京経済雑誌』第37巻, 明治31年, 1210頁)。同じ雑誌の「寄書」欄にはこの文への反論が掲載され「大原祥一と云へる人」は「時代後れの社会主義を抱懐吐露」していると非難されている(同, 1258-1259頁)。今日的な表現を用いれば, 大原は「穩健」な「社会改良主義者」というところであろうか。
 - 20) 福田徳三著『改訂増補経済学研究』(第四版, 明治42年), 365頁, 377頁, 参照。
 - 21) 『河上肇全集』第3巻(岩波書店, 1982年), 所収。
 - 22) 1906年1月10日に河上は「十九世紀以降に於ける産業上の革命(インダストリアル・レヴオリューション)なるものは, 人類の経済史に一大時期を劃せるもの也」と書いている(小括弧内は原文ではルビ)。前掲書, 173頁, 参照。
 - 23) 前掲書, 334頁。
 - 24) 吉田巳之助訳は「英国産業革新論」という表題であるが, 目次には「産業革命」という表現が用いられている。
 - 25) 数学においては「解釈」と「モデル」とが「同義語」であることについては, Rudolf Carnap, *Introduction to Symbolic Logic and its Applications* (Dover, 1958), p.173, 参照。

26) 構造は、たとえば、つぎのように定義される。すなわち、それは順序づけられた記号列 $\langle A, R, F, \{c_i \mid i \in I\} \rangle$ であって、 A は空でない集合、 R は A 上の「関係」、 F は A 上の関数、 c_i は A の要素である、と。Dirk van Dalen, *Logic and Structure* (3rd ed., Springer, 1997), p.58以下参照。 n 項関係や関数を一括して関係とよぶことにすれば、構造とは限なく関係に組み込まれている諸要素の集合を含む集合ないし圏（カテゴリー）ないしクラスである、と規定することができる。

27) いわゆる「歴史学」が厳密な意味において歴史「科学」たりうるためには、なによりもまずそれは史料批判学でなくてはならない。歴史「科学者」上原専禄はこのように主張している。この点についての私見は、拙稿「歴史学の構造と理念」（『一橋大学研究年報 経済学』第43巻 [2001年], 所収予定）のなかに披瀝されている。

28) これは OED に指摘されていることである。原典には、'The sense of capitalism sobered and dignified Paul de Florac', とある。この箇所の手書かれたのは 1854年のことらしい。

29) この説はパウルの辞典による。ロベールの辞典にはこの事実ならびにこれと関連した事実はまったく記載されていない。

〔付記〕 翻訳語としての「産業革命」の由来を検討するにあたり、文献資料の考証等にかんして一橋大学附属図書館の金沢幾子氏から貴重なご教示を得ることができた。また、プライスの翻訳書の所在や（注24）に記された事実は金沢氏から直接教えていただいた事実を書き移したにすぎない。同氏のご助力がなければ本稿はきわめて不完全なものとなっていたであろう。末尾ながら、特記して謝意を表しておきたい。

（一橋大学大学院経済学研究科教授）